

日中韓とアジア的価値の幻想

久田 和孝

現在の対立の起源

日中韓の共生と協力は自明の理である。そう信じ歩んできたはずの日中、日韓関係は戦後最悪と言われる状況にある。2008年から開かれてきた日中韓首脳会談は、日本と中国が2度目のホストを終えた2012年の春を最後に、翌年の韓国の番より中断している。理由は翻るまでもなく、その夏から再燃した日中、日韓間における領土問題に端を発した関係の悪化である。したがって安倍外交への評価は別として、事実として対話が途絶えたのは2012年夏の時点であり、野田、胡錦濤、李明博のそれぞれ前政権下で現在の緊張は創出されたということができる。否、今思えばこの三国の指導者たちがレームダックに陥っていたからこそ、この事態を招いてしまったのだろうか。

三国協力という幻想

この20年、中国経済の台頭、韓国の大衆文化の浸透などを受け、日本における対中韓イメージは激変してきた。もはや日中韓の結び付き強化はASEAN（東南アジア諸国連合）+3の枠組みから外れ、「歴史の必然」（麻生総理）として推進されてきた。だがそれは、東アジアにおける「共通の価値」「地域主義」といった地域固有の実在性を前提として語られていた。現在のような袋小路の三国関係を前にしたとき、私たちは経済領域の協力拡大以外に、いかなる「価値観」を共通の土台にしてきたのか疑わざるを得ない。北朝鮮を巡る安全保障の問題以外に、いかなる「理由」があって協力を謳ってきたのか。仮に歴史認識をその対立の要因だと据えるならば、このかくも脆い三国協力という概念を支えた言説は果たして何であったのか。

アジア的価値の限界

三国協力が依ってきたものの一つに「アジア的価値」、とりわけ東アジアの価値観がある。個人の利害を優先し経済と政治の合理化を「グローバルスタンダード」として押し付けてきた欧米的価値に対し、アジア的価値は家族・集団の利害から社会へとアプローチする「美德」をもって反発してきた。人権や民主化を要求してくる欧米的価値に対しアジア的価値は、個人と国家の間に家族関係を置くことによって社会の調和を保とうとする東アジアの家族主義的国家観を盾に、自国の体制を護り通してきた。だがその内実は、思惑すら通わない全く異なるタイプのリーダーシップによって牽引されている。たとえば日本は集団形成原理として独自の起源をもつ「イエ型社会リーダーシップ」であるが、韓国は儒教的血縁原理の影響を排除できない「伝統社会型リーダーシップ」である。ここにあって中国を当てはめるとすれば、一党支配による「命令社会型リーダーシップ」とでも呼ぶことができる。

それでもこうした異なる政治、経済文化は、むしろ相互作用をもたらす価値体系としてもはやされた。その背景を儒教思想と地域経済発展の因果関係に求めようとする時期もあったが、結局は経済発展と民主化との関係においても比較説明の限界に直面し、今や「アジア的価値」を探る動きはこともなく立ち止まっている。それは至極当然のことであった。

文明の優位を信じる指導者

アジア概念が、欧米諸国による「異質な東洋」としての二項対立的なものとして定義されていたからである。E・サイード (Edward W. Said) は、地域そのものを「人間活動の所産 (人為) という歴史的な存在」と規定して、このアジア概念の胡散臭さを批判している。だが、それにも拘わらず東南アジアをはじめとするアジア諸国では、次々と経済成長を成し遂げる中で「アジア主義」の言説に裏付けられ、「アジア的価値」の魅力は瞬く間に拡散してきた。とりわけシンガポールの初代首相、リー・クアンユー (Lee Kuan Yew) が独立と開発独裁の強化にアジア化とアジア人としての自覚を利用する過程で、多民族を包括しながら近代化を推し進める格好の裏付けとしてこのアジア的価値は汎用された。リーは英語一辺倒の言語環境に対しても警戒を強め、二言語教育の必要性を打ち出し、シンガポールの発展こそは「各種族文化の価値観の堅固な枠組みとアジアの緊密な家族制度」がその成功要因であったと強弁した。

経済発展を至上命題として猛進してきた東アジアの日中韓は、地域内の経済交流が浸透したことで、西欧的価値や近代性に対し抱いてきた劣等感や従属性を跳ね返すため、このアジア的価値観を漠然と受け入れた。この本質的に受け身で取り入れた概念は、十分な咀嚼がなされないまま、単に儒教を共通倫理として、その母体の上に「東アジア的価値」を被せた。この地域ではそもそも国家主義イデオロギーの言説からして、絶対的ななじれが存在しているにもかかわらずだ。国際化が進展するほど、言語、文化の軋轢が顕在化しているのに、それらをすべて風呂敷で包み込むような、強引で脆弱な定義のもと、東アジアの連帯は夢想された。脱冷戦の括りの中で、ささやかな理論的根拠となるはずだったS・ハンティントン (Samuel Phillips Huntington) の8つの文明区分でも、中韓を含む儒教文明 (中華文明) とは別個に日本文明の存在が説かれてしまった。日本は東アジア文化圏とも異なる、オリジナルな文明を有しているのだと。冷戦終結から間もないこの時期に政界に飛び出してきた、今日の日本のリーダーたちが受けた影響は少なくないだろう。

したがってこうした東アジア的価値を唱えた人たちは同床異夢を見ていたのである。共同体の形も安全保障に限ってイメージされていたのは、EUのような水平的な地域統合ではなく、最初から垂直型の収納的統合である。互いを括り合うことで安心感を得る。それは外に対する備えとしての団結ではなく、むしろ互いを縛り合うことで摩擦や突出を防ぎあおうとする隣組のような袖口の引っ張りあいである。もちろん貿易や観光、文化交流で近接する地域での活動が最も重要であることは間違いない。それでも東アジア特有の位置関係でみたとき、北朝鮮は中国と韓国にとっての接触 (触れている) 隣国であり、そしてまた日本だけが太平洋を挟んで米国を「隣国」として位置づけ、その影響を受けている。地政学で語られるならば、この本当の意味での「隣人」との付き合いに、価値や思考の影を踏まれずに自由ではいられない。米国主導の国際秩序が遺伝子的に染み付いた国と、そうでない国との間で、文明の優劣をかざして机の下で足を踏みあってきた東アジアでは、アジア的価値観の存在は空疎であり、そして、ぶれていた。

東アジアを覆う反知性主義の連鎖

それでもなお、我々がその幻想を確信に変えたのは「東アジア共同体」論である。1997年のアジア通貨危機の発端となったタイのバート暴落を契機として、地域制度の構築を目指して東アジアは抜け出そうとした。そのときに経済大国の日本が考えた東アジア共同体の無責任さは、経済統合を目指す金融と貿易の相互関係の深化により、他国の被植民地化の記憶や領土を巡る思惑に蓋をすることができると錯覚したところにある。たとえば、北朝鮮は目先で行われる米韓合同軍事演習をことのほか忌み嫌う。韓国にとって、また米国にとって安全保障上の当然の権利であり、通常の訓練であると称されるこの合同軍事演習は、軒先で銃剣を振り回される恐怖を北朝鮮に与えている。それが抑止であることは論を俟たない。だが同様に日本が安全保障の自国の権利と称して行ういかなる防衛議論も、植民地解放から100

年と経ていない地域に対してそれは、言い知れぬ恐怖心を与えている。私たちはそのことにあまりにも無自覚である。

この問題が啓示しているのが、最近語られるようになった「反知性主義」だ。「実証性や客観性を軽んじ、自分が理解したいように世界を理解する態度」（2014年2月19日付朝日新聞、佐藤優）と定義される概念である。異なる意見を持つ他者との公共的対話を軽視するというこの反知性主義は、自分に都合の良い物語の中に閉じこもり、その独りよがりな決断を重んじるという。今、日中韓でナショナリズムに酔う人たちは、明らかにこの反知性主義の連鎖に陥っている。反日デモもヘイトスピーチも、その暴力性を伴う爽快感に浸る反知性主義である。それを抑えるには、彼らが強要してくる主張を拒み、その自由を尊重することをしかない。互いを煽る言論やコマーシャル（商業主義）に歯止めが利かないのは、かつてのように関係修復に本気で取り組む人間がいないからだ。ナショナリズムの響きから、その暴力性を覆い隠して代替したはずのアジア的価値は今、その動機さえ失ってしまったかのようである。

最後に残るアジア的価値の希望

日中韓は、政治制度に首相、国家主席、大統領を置く。自衛を募る日本と、徴兵で民族を抑える中国、北の侵略を防ぐ韓国。経済はそれぞれイノベーション、労働力、技術産業の優位を誇るが、内需の拡大と縮小は対称的な日中韓。アメリカの呪縛を逃れようと辿り着いた日中韓の絆は、共通の価値を創り出せないままに傷つけあっている。

そもそも日中韓の対立によって失われるものは何なのか。それでも国は崩壊せず、政権も揺るがない。むしろ互いは対立や非難によって政権基盤や体制の強化に結び付けている。北朝鮮、香港、台湾といった地域内の国は、この対立の蚊帳の外にあるようで、むしろ三国の関係性の相対化を歓迎しているのではないだろうか。

韓国の故・金大中元大統領は、中国古代の民本政治、朝鮮時代の東学など、アジアの伝統的な思想に根ざした「アジア的民主主義」の存在を主張し、当時のクリントン米大統領が掲げた対アジア外交における「人権・民主化」の要求に対し陣を張った。約20年前のことである。

幻想が解かれた今、我々がこの地域で死活的に協力の必要に迫られているのか、本当に共感を得られる価値をどこに見出すのか、経済論議だけに依らない、東アジアの共同体の必要性の有無から、根本的に見つめ直す作業が始まっていい。言説空間の中で主張という名の攻撃を尽くし、吐き出し合って残されたものに、一縷の輝きが放たれていれば、きっとそれこそが「価値」に相当する地域の遺産である。

(ひさだかずたか・神奈川大学外国語学部助教)